

ROUNDTABLE

「ヴィクトリア朝の子供たちと幼年期について」

Victorian Children and Childhood

幼年期史
Hugh Cunningham

ヴィクトリア朝における
幼年期
Sally Shuttleworth

I 訳者まえがき

以下の2つの評論は、*Journal of Victorian Culture* (9.1 Spring 2004, Edinburgh University Press) からの抜粋翻訳である。ヴィクトリア期を対象にしたイギリス史、文化史の中で最近もっとも関心が集まっているのは、子供研究、幼年期研究だという。この視点から H. Cunningham, S. Shuttleworth 両氏が最近の動向を論評している。幼年期史には大きく2つの研究形態があるが、どちらの研究形態も最近の研究では従来の研究から大きく前進できない、いくつかの共通した問題を抱えているという。幅広い視野と領域を持った先行(共同)研究の提案であり、そうした研究の難しさの指摘でもある。両氏は最近注目を集めたいくつかの研究を紹介しながら、乗り越えるべき課題をさまざまな視点から提案している。Roundtable には3つの評論が掲載されているが、1つを省略した。そのため序文を省くのが適切と考えた。また原文表記が望ましいと思われるもの(著者、書籍、人物、脚注など)は、すべてそのまま引用した。誤訳があればすべて訳者に帰する。両氏に感謝の意を表したい。

II 幼年期史

幼年期史を取り上げる研究者は、おおむね2つのグループに分けられる。幼年期について主要な関心を歴史的認識から捉えるグループ、そして特定の時期、地域に絞ってそこから当時の子供の姿を想定してみようとするグループである。過去10年間では、ヴィクトリア朝の幼年期に関し立った2冊の著書が、この2つの流れを例証している。Carolyn Steedman の *Strange Dislocations: Childhood and the Idea of Human Interiority 1780-1930* (London: Virago, 1995) と Anna Davin の *Growing Up Poor: Home, School and Street in London 1870-1914* (London: Rivers Oram Press, 1996) である。もちろんこの区分は大雑把ものだ。Steedman は、自身の立場を次のように明快に述べている—私がこの本で論じたいのは、大人の信念、欲求、空想が子供の姿に投影されてしまうということです。それにはじめから、私には子供の幼年期の経験を描こうという意図はないのです⁵。だが彼女の口調は、子供たちの実際の成長パターンに基づいた、ヴィクトリア朝時代の心理分析研究の形を取っている。Davin も、子供たちの生活について第一級の記録内容を特権的に援用する一方で、厳密な意味での幼年期については、Steedman と同じような口調で文脈につじつまを合わせている。

幼年期の経験を再検討するといった手法は、最近いろんな研

究を促している。ロンドンの労働者階級の子供たちを生態学的に総括し描くことが、Davin の成果の一部でもあった。つまり労働者階級の子供たちの家族は、中流階級家庭の基準とおおよそ一致しなかったこと。また中流階級家庭が頻繁に移転したり、家庭の経済状況が上下したり、彼らの隣人、学校といった基準が一致しないということを示した。さらに重要なのは、労働者階級の子供たちと慈善家たちや州政府との関係を示唆した点だ。最近の研究では焦点はより狭められている。その結果取り上げられるのは、たぶん思われていた以上に耳にする子供たちの声である。その声が今聞こえてくる。片隅におき去りにされた子供たちが強調される。孤児、浮浪児、さ迷う子供、虐待される子供、若年犯罪者、救貧院に収容された子供囚人—工場や感化院に収容された子供囚人たちだ。以前の研究者たちは、主に行政史や制度史研究に満足していただろうが、最近の研究者は厳しいほどに子供たちの声を回復しようと追求してきた。また、州政府や慈善機関とつながりを得た子供たちと親たちとの相互関係を、叙述しようと懸命になってきた。Heather Shore の *Artful Dodgers: Youth and Crime in Early Nineteenth-Century London* (Woodbridge, Suffolk: The Boydell Press, 1999) は、若年犯罪者との当時のインタビュー記録を通して、若者(女子はほとんどいない)がどのようにして犯罪に加わり犯行を頻繁に繰り返すのか、窃盗常習犯になることが厳しい環境の中で生き残るためのものであったのかどうか、を取り上げている。Louise Jackson の *Child Sexual Abuse in Victorian England* (London: Routledge, 2000) は、裁判所がどのように記録したかを明らかにしている。また人々が裁判記録で語った内容が、歴史的検索に抵触しやすいものであったこと。子供虐待防止委員会が設置されるかなり以前から、男たちが少女の家族の一員でない場合にはなおさら、少女を虐待する男たちに公然と認められる因習的な文化が存在していたということ。だが次のことも示唆する。虐待される子供が、まるで他の子供に害を与えているようにみなされ、また虐待を受ける子供が時々親元から隔離され施設に入れられた、ということだ。親から隔離されるそうした子供たちの声を、Lynn Abrams は、*The Orphan Country: Children of Scotland's Broken Homes From 1845 to the Present Day* (Edinburgh: John Donald, 1998) で詳しく紹介している。スコットランド人は自分たちから子供を遠ざけることを、里子に出すとか預けるといった里子政策として自慢してきた。しかし Abrams は、このような考えには移民計画にみられるように、どのようにして家族から隔離されそうになるのかといった子供たちの映し出される体験の中に、親たちの冷淡さが潜んでいる

と警告する。都会生活様式の恐れからくる社会的画策、それに子供に実直な関心を持たない、こうしたことが多くのスコットランドの子供たちを家庭から遠ざけた状態にした、と Abrams はいう。労働者階級家庭とその子供たちが州政府が強化する監視にどう委ねられていたか、また彼らが家族構成にどう携わっていくのか、こうしたことを知るために片隅におかれた子供たちの声を取り上げる試みは、これまでの常套的な資料を用いてきた歴史家たちによって整合的につなぎ合わされてきている。ヴィクトリア朝時代を通じて、またあらゆる社会レベルで、家は理想化され国家自体を表す女性的な比喻としてみなされた。しかし国が自由に介入できると考えられるようになったのと同様、労働者階級に対してそう思われたのである。*Friends of the Family: The English Home and Its Guardians, 1850-1940* (Stanford: Stanford University Press, 1998) で、G.K. Behlmer は、地区訪問者や学校視察官や NSPCC (18歳未満の少年審判所) を含む代理機関などが家庭に与えるプレッシャーを検証している。労働者階級家庭は、新しい代理機関施設を自分たちの慈善施設として頻繁に利用できた。15世紀にさかのぼってみても、わが家は城といった考えを愛するイギリス人にとって、州政府や慈善機関が実施した視察はまさに警鐘を鳴らすものであったのだ。

学校は家庭以上に、イギリスの中心的課題とは、イギリス国民とは、といった新しい考えを教え込むあからさまな場であった。Stephen Hearthorn は初等学校で広く利用された読本を検証し、読本や他の教材を通して「国家たる教育制度の体系的過程が、1880年から1914年にかけて先導されてきた (ix) ¹⁾」事実を発見している。彼はいう—これは帝国とか民族の持つ自負を単に教えるといった問題ではなかった。教師の口調よりは、もしあるとすれば、市民権も自由も持てないかもしれないという不安にかられた情報筋に反映されたものであった、と。こうした分析が、州政府、慈善組織とつながりを持った子供たちを考察する人々の傍らで起こりうる、という。特に19世紀後期から20世紀初頭にかけて、国の価値を子供たちに植えつけながら、国の未来をまた帝国を守らなければならないという懸念があった。

19世紀後期の初等学校教師の話しぶりでは、初等教育での労働者階級の子供たちは、炭鉱や工場や路上でおぞましい生活を送った先代の子供たちに代わる、救済受益者として描かれた。児童労働は、ヴィクトリア朝幼年期を扱う歴史研究家には、避けがたい1つのテーマとなっている。この研究は、Clark Nardinelli の新古典、*Child Labor and the Industrial Revolution* (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1990) が明らかに起爆剤となっている。この研究は次のように論ずる。親にとって子供を工場に出すことは、家計に寄与するという意味でごく当たり前であった。しかしヴィクトリア女王が即位する時代までには児童労働はすでに法的に促進されており、当然児童労働の発生率が減少していく流れがある。しかし減少の流れの大きな原因は、賃金の上昇によるものであった、と。Nardinelli が強引かつもっともらしい主張で児童労働の悲惨さに焦点を当て、ありきたりの方法を取る悲観的な研究者に激しく対抗する。しかし、Lord Ashley と工場法との関係を結びつけて子供たちを救おうとする手法は驚くほどのものでなく、調べる程度に留まっている。*Hard at Work in Factories and Mines: The Economics of Child Labor During the British Industrial Revolution* (Boulder: Westview Press, 1999) で、Carolyn Tuttle は自身の立場をその表題で明示している。Tuttle は需要側から

アプローチし、次のように論じている。雇主は労働者としての子供を必要とした。技術面という理由から—たとえば昔の木製の機械装置は低く小さく作らなければならなかったので、機械操作は子供に最適であったということ。もう1つの理由は市場競争があったということ。彼女はこのように悲観主義者の立場を取り戻している。非常に異なったアプローチを、Sara Horrell と Jane Humphries ²⁾ が取っている。彼女たちは、子供たちが仕事を始める年代や子供たちの家族収入に果たす貢献度を算定するため、1787-1872年間の家計予算からできる限り証拠資料を収集している。また初期産業革命期における子供の仕事が、その前後から拡大したという従来の見方に沿った根拠も示している。*A Thing of the Past? Child Labour in Britain in the Nineteenth and Twentieth Centuries* (Liverpool: Liverpool University Press, 1999) で、Michael Lavalette は産業革命期以前にさかのぼった視点から、長期にわたる児童労働に関する評価について大きく貢献している。公式な統計が取られて以来、児童労働の発生率が減少し始めたこの150年間で、子供たちがどのように働き続けたのか。また子供たちが、経済の中心産業から末端産業へ移動したこと。特に、使い走り、男児の配達業、女兒の家事奉仕業といった、サービス部門への移動について述べている。児童労働から子供を解放しようとする話とは幾分矛盾することになるが、児童労働は、Anna Davin がロンドンの事例で詳しく示すように、労働者家庭の生活体験に深く根を下ろしている。

上述したように、仮にいくつかの話題が今日なお新たな光を投げているのであれば、2、30年前と同様人々の解釈もそのまま存続していくものだ。たとえば、1970年、80年代に出版された大衆教育に関する研究書は、非常に卓越している。Gillian Sutherland は、著書 *Elementary Education in the Nineteenth Century* (1971) に関する冊子—所属先 Historical Association の刊行—でいくつかの新たな事実を発表し、それは同時に他の研究者に研究対象をもたらしした。しかも、その立案された基本的概念は今日定着している。この基本的概念は、J.S. Hurt の *Elementary Schooling and the Working Classes 1860-1918* (London: Routledge and Kegan Paul, 1979) や、Thomas Lacqueur の *Sunday Schools* (1976) ³⁾、それに Phil Gardner の *The Lost Elementary Schools of Victorian England: The People's Education* (1984) —創意工夫を私的に凝らした冒険学校に関するもの—などによって補われている。もちろん、その概念的な限界にいくつかの見直し論があるものの、この概念の全体像は、Eric Hopkins の *Childhood Transformed: Working-class Children in Nineteenth-Century England* (Manchester: Manchester University Press, 1994) でみられるように、学校教育関係へと概説されていく過程で再度確認されている。学校での子供の体験記録に関して悲観的な報告が一般的であるが、これに対して Jonathan Rose はある挑戦を試みている。Rose は1970年代に収集された歴史的口述資料まで戻り、資料に即していえば、学校がこれまで考えられてきたほどに子供たちの修羅場ではなく、また学校へ行くことは事実「子供たち自身の意思によるもの⁴⁾」、と論じている。

中流階級の子供たちもまた、注目されていないのが現状である。アメリカにおける研究に比べ、わが国では、たとえば文化的視点からの資料(写真とか家具とかおもちゃ)を用いて、家庭のプライベートに踏み込むといった試みもこれまでほとんどない。だがこの批判に対し大きな例外がある。John Tosh の *A Man's Place: Masculinity and the Middle-Class Home in*

Victorian England (New Haven and London : Yale University Press, 1999) である。これは中流階級の子供たちについて理解し考える上で、まさに先行的な試みである。家族のこれまでの公式記録を深く掘り下げながら、Tosh は 1830-80 年間の中流階級の人々が、家庭文化生活に生きたことをはっきり示唆していく。父たちは常に存在しており、子供の養育に常に関わっていたという。19 世紀後期においてのみ、家庭生活において家庭に没頭しすぎるのは男性的ではないと思われるようになった。いわば家庭には手に入れ支配できる主権があった。それに、そうした仕事を遂行しようと目覚めたのが男たちであった。

家や学校が子供たちにとって適した場であれば、子供たち、両親、それに国にとってより大きな関心は、健康についてであった。子供の死亡は、貧困街の住民に限らず裕福な家庭に突然破壊的な打撃を与える。1850 年代の Catharine と Archibald Tait (将来のカンタベリーの大司教) 家族の、子供を失ったときの苦しみを考えればよい。およそ数週間のうちに、しょう紅熱で彼らは 5 人の子供を失っている。医療改善はそのさなかにあった⁵。Robert Woods と Nicola Shelton は *An Atlas of Victorian Mortality* (1997) で、天然痘としょう紅熱による高い幼児死亡率と子供の初期死亡率が 19 世紀中ごろから減少していくのを紹介するが (1-4)、これも有益な情報だ。ハシカ、百日咳、ジフテリアは主な死亡原因であったが、もっとも大きな死亡原因が呼吸器官の病気であったという。だがこうした死亡率が、どのように罹患率に関与するのか明らかにされていない。

幼年期に関する研究書は、これまでその史観と体験史の役割分担という形で、幼年期の体験分野におかれている。少なくとも、研究の表題は幼年期の体験分析の方向に傾倒している。少なくとも歴史という領域では、Steedman の研究はほとんど影響を与えていない。われわれが今有する幼年期の体験は、大人たちが描いたり想像したりするやり方で形作られてきた。Steedman が論ずるのは、大人になる過程で自分がそうであったとか、そうであったかもしれないといった、深く傷ついたり子供の心理に重ね合わす大人の感覚が働く、ということだ。そのため大人たちが、こうした失われた願望を具体的に例示するものとして子供たちに注意を払い、自分自身が経験したような幼年期から子供たちを開放しようとするのだろう、と。こうした幼年期に対する見方、子供たちの経験に対する見方は、どこかで一緒に取り上げられなければならない。Davin と Steedman はともにこの作業をやり遂げ、2 人のもっとも著しい接点で、Mayhew が取り上げたオランダガラシの葉を売る少女⁶の事例を明らかにする討論にみられる。

「ヴィクトリア朝の」という形容詞を、子供たち、幼年期、またそうしたものにつければ多くの制約を受けたイメージが心に浮かんでしまう。極端な例に、Dickens の作品に登場する人

物 *Oliver Twist* や *Little Nell* や街路掃除夫の Jo, あるいは他の例として小公子 *Fauntleroy* や *Alice* を考えてしまうと、その間に浮かんでくる人物がなかなかみえてこない。そのくらい当時の小説は広範囲に、ヴィクトリア朝人の幼年期についてわれわれの考えに輪郭を与えてきている。だから研究者自身、「ヴィクトリア朝の」子供たちやその幼年期を考えること自体が本当に有益なものとなっているかどうか、と問いたださねばなるまい。歴史考察に想定しうる時期として治世を考察する習慣は、Jubilee の時代、特に Diamond Jubilee の時代に始まったらしい。作家たちが、摂政時代当時の子供の生活が向上していたことを褒める一方で、1830 年代、40 年代当時たまたま見出した子供たちの状況を、ある不信の念でふり返ったのは珍しいことではなかった⁷。それ以後、Lytton Strachey 以後という人もいだろうが、ヴィクトリア朝人のいかなる幼年期も、古めかしくかつ停滞気味で乏しい状況になってしまったのである。例外として、Samuel Butler の *The Way of All Flesh* (1903) や、Edmund Gosse の *Father and Son* (1907) で描かれたまにみる中流階級家庭の物語はあるのだが。しかしこれらの家庭に描かれる威厳さは、ノスタルジックか、または不思議なくらい逸脱的なもの、ちょうど Gwen Raverat の *Period Piece* (London : Faber and Faber, 1952) に描かれている回想録とか、児童文学黄金期における古典的作品の類といった内容だ。

エリザベス朝という形容詞をつけて、20 世紀後期のイギリスの幼年期を書きたいと考えるものはいない。ここに述べた作品のほとんどは、ヴィクトリア朝のある特定時代に作品そのものの範囲を留めていない。従来からヴィクトリア期には、「エドワード期を含む」時代を加えるしきりになっている。しかし第 1 次大戦が、幼年期史における 1 つの有用な区切りとなるかどうか明らかでない。Abrams や Lavalette の研究にみられるように、ヴィクトリア朝時代において、ある時期が一般的な見方として、今日われわれに手助けとなる分析の一出発点と理解されている。他の研究者たち—特に Roger Cooter の *In the Name of the Child : Health and Welfare, 1880-1940* (London : Routledge, 1992) に収められた彼らの論集は実に有力なものだ—は、1880-1920 年を子供と親と国の現代の関係が系統化され実践化された時代と指摘している。本を出版するものにとって、19 世紀という表現よりヴィクトリア朝という表現が扱いやすく好まれる—だが重荷だ。現代では、ヴィクトリア朝人の世紀よりもっと核家族的になっているのだから、子供とか幼年期という表現から、ヴィクトリア朝という形容詞をはずす時期にきているかもしれない—しかし 19 世紀の子供研究、幼年期研究は停止すべきではない。なぜならここで論じた多くの研究書が示すように、われわれの現代的な考えや行動のルーツの大半がその時代にあるからだ。

(注)

1. Stephen Heathorn, *For Home, Country, and Race: Constructing Gender, Class, and Englishness in the Elementary Schools of Victorian England, 1880-1914* (Toronto, Buffalo and London: University of Toronto Press, 2000).
2. Sara Horrell and Jane Humphries, “The exploitation of little children”: child labour and the family economy in the Industrial Revolution’, *Explorations in Economic History*, 32 (1995).
3. Thomas Laqueur, *Religion and Respectability: Sunday Schools and Working-Class Culture 1780-1850* (New Haven and London: Yale University Press, 1976).
4. ‘Willingly to school: the working-class response to elementary education in Britain, 1875-1918’, *Journal of British Studies*, 32 (1993) : 111-38.
5. Pat Jalland, *Death in the Victorian Family* (Oxford: Oxford University Press, 1996), 128-39.
6. Steedman, *Strange Dislocations*, 117-29. Davin, *Growing Up Poor*, 157-61. These themes have been further explored by Anna Davin in ‘Waif stories in late nineteenth-century England’, *History Workshop Journal*, 52 (2001) : 67-98.
7. See, e.g., W. Clarke Hall, *The Queen’s Reign for Children* (London, 1897).

III ヴィクトリア朝における幼年期

過去30年間人文科学研究者は、まずジェンダーを次に人種を、歴史的かつ言葉通りに分析しながら階級間に考慮される要素として研究に加えてきている。こうした知的恩恵を受けていたので、われわれは、ヴィクトリア朝時代における帝政の重要性とかジェンダー論の作用といったものを念頭においてこなかった。しかし今われわれ自身の研究分野のキーワードを、多少の戸惑いを感じながら振り返ることができる。階級、ジェンダー、人種の三位を、時代に、とりわけ幼年期に加える時期にきているのではなからうか。構造的に違いがみられるという点で、ここには明らかに類似的なものがある。ヴィクトリア朝時代、子供たちの発言は現代のように法で守られることはなかった。それに彼らの権利は従属的地位におかれていた。また子供たちの本当の声を回復させるには、労働者階級の人々や集団を対象にすると同じような困難さにも直面する。またこの困難さは、当時の有権者層間で記録が残っていないとか、口述以前のものであると、さらに厳しい。改革論者の声は強く聞かれるが、子供の声は大人の声を抜きにしてほとんど聞かれない。黒人奴隷の口述が、白人改革論者を通して代作されるのと同じやり方で聞かれるのである。子供の場合、その声の「わずかな痕跡」は、感情をすでに失った過去を思い起こそうとする彼／彼女自身の成長した自己からやってくるのだ。

私は類似性を強く前面に出したくないが、フェミニストや幼年期の領域調査におけるポスト・コロニアル研究が展開するものから、学ぶものが多くあると思う。初期のフェミニスト研究にみられたように、これまでに失われた本来の言葉を回復しまた分析に再度焦点を当てようとする同様の試みがある。Hugh Cunninghamが言及するように、幼年期に関するごく最近の優れた歴史研究は、子供の体験を調査し再度捉え直すやり方で、規格的な歴史考察から移行している。避けて通れないことかもしれないが、子供たちが歴史上の記録に入らぬやり方がなされると、その焦点はCunninghamのいうような「片隅におかれた子供たち」に当てられる傾向になってしまう。19世紀の*Times*を読み切ることは、覆うすべのない印象を与える子供たちを犠牲者として捉えるのと同じことだ。いわば子供たちはおおむね虐待され見捨てられ、あるいは誘拐される存在として特徴づけられているようにみえる。というのも視野に入ってくるのは主に労働者階級の子供たちであり、書かれている内容の大半がこうした子供たちの歴史だ。もしわれわれが文字通りその出発点を子供におき、全体的な論考に至るところまで広げ、虚構的、家庭的なものから医学的、科学的なものまで幅広い考察を与えれば、もっと複合的なイメージを作り上げることができる。ヴィクトリア朝の幼年期についてさらに幅広く掘り下げることができる。

ヴィクトリア朝の子供研究で研究者が直面する問題の1つは、研究対象の厳密な定義である。当時も現代同様この定義が非常に曖昧であり、子供という語に暗示される正確な年齢範囲に混乱があった。つまりより低層の労働者としての子供が、大人の視点から、中流階級生活圏内に属した社会的空間に生活していたなどと捉えられたため、さらに混乱してしまった。19世紀における幼年期を、産業、教育改革から子供福祉に至るまで、「保護される」幼年期の年齢幅が養育次第という声明を出したいろんな法制度解釈の研究がこれまで多くある。労働の禁止とか、義務教育の年齢拡大とか、性的合意年齢といったものだ。たとえば、Harry Hendrickの*Child Welfare in England*

1872-1989 (1994)を参照していただきたい。しかしながら正統派の歴史家にとって、この法制全体が幼年期に関し常に移動区分があり広範囲になるため、19世紀の子供たちに対する見方を変えていく方法を探さねばなるまい。

仮にわれわれがヴィクトリア朝の幼年期医療という定義に戻るなら、その定義に当時と似たような曖昧さや混乱が生じてくる。またその時代の法改正から、予想以上のきわめて異なった年齢分布がある。当時幼年期は、どうにかこうにか10代前半に引き上げられつつあった。19世紀後半から20世紀初頭の卓越した幼年期医学理論派のひとりThomas Cloustonの場合、12、3歳ごろから始まるものとされていた思春期を、18歳から25歳の幅で提示している。こうした医学論争では、幼年期は25歳、時に30歳まで拡大されるように思えたし、部分的にはイギリス民族の衰退という懸念から広がったものだ。Cloustonは、エディンバラ大学の医学生に自己抑制という講義で、「自分の口ひげが生えてくる前に自分の種を増殖させるものは、自然の法を破り、末裔に対し罪を犯し、自分が知る以上に世の中を悪化させる¹⁾」と述べた。19世紀末の数十年間においても、同じような懸念が女子教育に対立するような医学見地から生じている。つまり、発達する生殖機能から自分の体エネルギーを頭脳に向ける女子は、妊娠の可能性を著しく失いかねない。また自分の子孫を産むという特性を失いかねない、というのだ。中流階級の子供養育を取り巻く医学的不安は、子供の性的能力に入る年代と、「子供」が十二分に社会的に大人の年代に属していると思われる確実な時点といった両面で、幼年期の厳密な区分に関する文化的懸念と密接に絡んでいたのである。Henry Jamesの*The Awkward Age* (1899)は、この板ばさみ心理を描いた小説としてまさにふさわしい題名がついている。この小説では、いつも覗き見志向で接してくる同僚の大人たちに、18歳の「子供」Nandaの反応が主題となっている。仮にわれわれが自分たちの幼年期の見解を、ヴィクトリア朝時代の医学や小説の主題にまで検索していくなら、必然的に取り込める年齢範囲を広げなければならない。21世紀の概念をはみ出で、20世紀初頭以前にさかのぼった幼年期の見方を受け入れるべきなのだ。

ヴィクトリア朝時代に対するフェミニストの反応という点で、われわれは初期の「女性像」の議論をはるかに越え、もっと複雑であやのあるイデオロギー的な理解やさまざまな表現過程へと展開してきている。以前の研究は、表面上の価値観からヴィクトリア朝人の女性らしさを取り上げる傾向にあったし、誤解を生む見方、いわばヴィクトリア朝人がすべての女性を処女か売春婦に分けるような誤った考えを流布した。しかしごく最近の研究は、当時の女性が非常に複雑で、矛盾に満ちた感情を秘めていたことを検証している。ヴィクトリア朝研究の解説者たちは、当時の女性をすっきりと差別グループに区分してしまうどころか、女性の高貴な性分をよく持ち上げ、同時に女性自身の肉体的自己に甘んじる姿を嘆いたものだ。幼年期研究における処女／売春婦区分の概念は、幼年期が持つ無垢というローマカトリック教内の対立意見に等しく、原罪表現としての子供という福音主義の扇情的対立概念でもある。こうした2つの概念は、明らかに両者ともヴィクトリア朝時代（後者は特に最初の数十年間は影響力があった）において広く普及する一方、両者はともに予想以上に激しく対立しなかった。Caroline ArscottがMillais*の絵に描かれる子供たちを分析して、子供たちの「無垢」が問題を孕んでいると指摘する。子供たちの反応に無垢、無邪気ではなく、誰も非難できない本来の邪気が潜んでいることを示唆している。この見方は有益で、19世紀の

子供の発達理論が進開する上で、大いに刺激を与えてくれる。Hugh Cunningham が言及するように、幼年期を論述する歴史家はおよそ2つのグループに分けられる。幼年期の体験を注視するグループと、幼年期史観に関心を寄せるグループである。後者のグループとして、Cunningham は Carolyn Steedman だけを取り上げる。彼女の研究 *Strange Dislocations: Childhood and the Idea of Human Interiority 1780-1930* は、野心的試みであるが歴史的領域において注目するものがない、と彼はいう。Steedman の優れた表現はいくつかの問題を抱えているものの、少なからず彼女が展開する概念的な理論は、ゲーテの描く Mignon 像から具体的に見出した、幼年期への彼女自身の見解に結びついている。幼年期の見解について、科学や文学や歴史の領域を橋渡しする研究が十分に評価を受けないのは、この分野の特徴を示すものだ。Cunningham が論ずるように、区分はもちろん大雑把なものだ。多くの歴史研究は、幼年期の理論にも注意を払ってきた（彼自身の *The Children of the Poor: Representations of Childhood since the Seventeenth Century* (1991) は、子供の「粗暴な性格」を、文学的、人類学的、科学的見地から取り上げた力作である）。それでも19世紀の科学、医学、人類学がもたらした幼年期の発達に関する考察が、十分に研究者の注意を引きつけていない。精神医学分野では、たとえば、Janet Oppenheim の *Shattered Nerves* (1991) における幼年期の神経疾患論は卓越したものではない。同じように、Daniel Pick と Bill Greenslade は、*Faces of Degeneration* (1989) や *Degeneration, Culture and the Novel* (1994) の中で、退化に関する研究分野を開拓している。しかし幼年期考察に対し、これらの研究と絡んでこれまで19世紀後半の遺伝子理論の影響を扱うふさわしい研究が現れてこない。

Caroline Arscott は、Millais の幼年期の捉え方を「もう1つの世界」として、いわばそれ自体に根拠があり、道徳律とか目的論といった表現行為に本能的に反発する知覚的な「もう1つの世界」として、*Fortnightly* (1869) のある論説の個所「無愛想で、わき目もふらず、妨げも感じない子供たちのあの目つき—子供たちが頻繁にする目つきだが—が、人影のない小島を旅したものがみた野生動物のあの目つきを大人に想い起こさせます」を利用して、彼女自身の考えを明確にしようとしている。言葉は直接人類学や発達心理学といった言説にわれわれを引き込み、子供、動物、粗暴者とは、進化というはしごの一段を踏み出した生の原型として区別されたのである。Ernest Haeckel は、「個体発生は系統発生を反復させながら、その生命体を祖先の動物から現在に至るまで種のあらゆる進化過程を通り抜ける²⁾」、と1866年初めて論じた学者である。幼年期の捉え方は、この時代の種の理論にじかに関与していた。がその影響は一様に否定すべきものでない。Caroline Arscott が記述しているように、大人の支配に強く抵抗しているこの生の形態の中に、大人の反応が魅力や驚きやねたみによって着色されてきたのである。この立場に立てば、ごく自然な姿の子供に対する Rousseau の子供観に近い考えができる。また発達心理学の言説に近い考え方も可能だ。Lombroso の子供と犯罪者を結びつけていく悲観論は、子供の内的世界や子供の想像たくましい遊び心にもっと大きな関心を寄せることでまわっている。

ここでぜひ取り上げたいもう一枚の絵は、この時期急増する児童文学に関わるものである。世紀初頭の大半の道徳本が、子供の想像力の世界を称揚した作品に取って代わられたことだ。文学研究ではごく最近の U.C. Knoepfelmacher の *Ventures into Childland* (1998) を頂点にして、ヴィクトリア朝児童文学の

研究はまさに発展の一途を辿った。科学的、進化論的考察の展開に結びつくこれらの研究は、その大半が論説形式を取っている（たとえば、Tess Cosslett の ‘Child’s Place in Nature: Talking Animals in Victorian Children’s Fiction’ *Nineteenth-Century Contexts* 23 (2001) がそうだ）。Gillian Beer の *Alice in Space* (Chicago, 2004) は出版に大きな期待が寄せられている。ヴィクトリア朝文学一般で、Malcolm Andrew の *Dickens and the Grown-Up Child* (1994)、Goldie Morgentaler の *Dickens and Heredity* (1999)、ごく最近では Wendy Jacobson 編の *Dickens and the Children of Empire* (2000) などが、子供描写研究で Dickens 作品に焦点を当てている。もちろん他の作家の描く幼年期、小説形式について多くの論考もある (*Nineteenth-Century Contexts, Culturing Childhood* 21 特別号 (1999) は、ローマカトリック教とヴィクトリア朝関連にまたがった研究を通覧できるようになっている)。

Caroline Arscott が遊ぶ子供たちの絵や木版を分析するように、子供の想像的生命に対する先入観は、文学作品に限らずこの時代の芸術分野に浸透していた。子供研究協会の設立にとともに、1890年代までには、子供たちの遊びに関する分析は主要な科学的研究課題になった。親、教師、進化論研究家、心理学者と共同作業で、若者を理解していく最善の教育方法を含めた子供研究—その心についてまたその発達についての研究—に協会は着手したのである。Hugh Cunningham は文学的教育論に対し、次のような論評を加えている。学問の特性値は、1970、80年代に始まった時点で留まっている。がそれは、Gillian Sutherland のような特筆できる研究までだ、と。しかしここに、Adrian Wooldridge の *Measuring the Mind: Education and Psychology in England, c.1860- c.1990* (1994) を加えるのもよい。この研究は19世紀後半に発達した教育理論に注意を払って、アメリカの Stanley Hall やイギリスの James Sully、Francis Warner の影響下にあつてなおざりにされてきた子供研究協会の発展を考察するものだ³⁾。

さらに展開可能な教育観は、Oppenheim の *Shattered Nerves* に言及される「重圧」に関する論争である。ここでの論争はまさに研究分野を越えたものであり、その主要テーマの1つとして、Dickens の *Dombey and Son* (1848) から、Forcing Academy の Toots 氏と Blimber 博士に関する Dickens の叙述描写を取り上げている。そこからさらに、James Crichton Browne の1880年代影響を及ぼした研究の検証へと展開している⁴⁾。われわれの子供たちが学校で過度に伸長されていく方法に深く関与する時代では、次のように指摘すれば教育の面でもプラスになる。ヴィクトリア朝人は教育に関し実に「過敏なまでの恐怖⁵⁾」と形容される不安感を持ち、それに左右されたということだ。そのような「恐怖心」が中流階級の学校の詰め込み教育者によって、中流層の子供たちばかりでなく、おそらく不当に扱われ教育を受けてきた労働者階級の子供たちにも応用された。こうした問題を考慮しながら、Webster の絵画について Caroline Arscott が分析した *The Smile and The Frown* を少し違った角度から読むのも可能だ。彼女の子供たちへの共感がはっきりとみられる。彼女は、子供自身に当てはまるような「怠惰とか努力」という道徳的概念で子供たちを縛らない。むしろ、教訓的な言葉は若い心情にふさわしくないという判断が働いたのではなからうか。

ヴィクトリア朝の幼年期研究に関わる人たちは、原文と表現描写の両面から、定期刊行誌で掲載された絵図に長年親しんできた。しかしわれわれは、その上っ面をかじり始めたに過ぎな

い。約12万5,000の19世紀イギリス定期刊行誌を取めたJohn Northの*Waterloo Dictionary*が、まさにそう教えてくれるのだ⁶。1861年以後、特に新聞税が廃止されてから、大衆や専門家向けの雑誌が急速に増加した。子供向けの季刊誌から多くの教育専門の定期刊行誌へ、そして1890年代子供研究という表題の雑誌が多く登場してきた。しかしながら論争は専門家の領域に留まることはなかった。James Sullyの優れた研究*Studies of Childhood* (1895)の背景となった多くの論説は、広く多くの学会誌で、たとえば*Fortnightly Review*, *Popular Science Monthly*, *Cornhill Magazine*, *English Illustrated Magazine*, *Longmans'*, *Baby*各誌で初めて発表されたものであった。ヴィクトリア朝の幼年期に対する見方が複雑で一定ではないことを理解するため、われわれは定期刊行物の果たす役割にさらに細心の注意を払う必要がある。社会的、教育的、科学的論争、小説、解説すべてが関わり、一冊の学会誌に論述されたものであればなおさら、われわれは細心の注意を払うべきである。得意とする領域に関わる研究者は、他の学会誌の報告資料とどう関

わるのか検証することなく、自分の選択したテーマや論説を要約するに留まっている。George Eliotが*Middlemarch*で「全世界という、あの、心をそそるようなもっともらしい領域」と警鐘したように、われわれはもちろんそこに迷い込まないよう注意しなければならない。だが同時に、定期刊行誌についてもっと詳細な研究の余地も明らかに残されている。Arthur Boyd Houghtonの、幼年期の特徴ある姿を描いた年少向け雑誌*Good Words* (表題)とか、そのような類の雑誌を取り上げ、広く考察するといった機会があるはずだ。いろんな形式の資料が相互作用を生み出すかもしれないから、ヴィクトリア朝時代に登場したいろんな刊行物を写し保存しておくのも、幼年期研究を今なお構築する研究分野ではすばらしい発見につながるのではないか。

訳注

* Sir John Everett Millais, 1829-96, イギリスの画家

(注)

1. T.S. Clouston, *Science and self-Control. A Lecture to Students of the Edinburgh University* (Edinburgh, 1886), p. 13.
2. For a very thoughtful reading of Jane Eyre in the light of racial discourse, see Cora Kaplan, "A Heterogeneous Thing": Female Childhood and the Rise of Racial Thinking in Victorian Britain', in Diana Fuss, ed., *Human, All Too Human* (Routledge: New York and London, 1995).
3. Lyubov Gurjeva has also looked at the work of the Child Study Association in her interesting thesis on 'Everyday Bourgeois Science: The Scientific Management of Children in Briatin, 1880-1914', University of Cambridge PhD (1998).

4. See, for example, his introduction to Dr Hertel, *Overpressure in High Schools in Denmark* (1885) - the phenomenon was a European-wide concern- and 'Education and the Nervous System', in Malcolm Morris, ed., *The Book of Health* (1883).
5. See Mrs S. Bryant, *Overwork from the Teacher's Point of view* (London: Francis Hodgson, 1885), p. 1.
6. John North, ed., *Waterloo Directory of English Newspapers and Periodicals, 1880-1900, Series 1*, 10 vols (Waterloo, Canada: North Waterloo Academic Press, 1997), I, 9. The *Waterloo Directory* is also available online at <http://www.victorianperiodicals.com>